

基 山 町 ま ち づ くり 提 案 書

基山町まちづくり基本条例第16条の規定に基づき下記のとおり提案します。

提案期 日	2016年 4月 21日	
提案件 名	住みよい町づくり	
提案者	住所又は所在地	
	氏名又は名称	
	※提案者が基山町の住民でない場合は、勤務先又は通学先も記入して下さい。	
	提案書の公表にあたり、住所、氏名及び連絡先の公表を希望しますか。 希望しない	
	※未成年者が氏名等の公表をする場合は、法定代理人の承諾が必要です。	
提案の 概要	子育て世代や小・中学生が集える場作り 区ごとの活動ではなく、基山町全体として考え、町民が主体となり、今後の基山町発展を考えるまちづくり	



目 標 設 定	2016年後期 9月～長期間
提 案 内 容	◎短期講座・・・曜日はバラバラ、託児付き ヨガ・メイク術・ベビーマッサージ・食育・子どもと直接 関わる職の人からの話など 対象は、そのときの講座により様々 ◎6カ月講座・・・子育て講座（睡眠・育児・しつけ・遊び方など） 対象は、子どもを養育中の保護者 ◎SGKプラザや小学校グラウンドの開放・・・毎週1回 <家と学校ともう一つの居場所> これらは、子育て支援係や教育学習課が中心となり、親の学習する場を作る。 イベントのように単発で行うものではなく、定期的に継続して行う。 またイベントとしては、基山キャンプ場を活かし、野外体験・ファミリー キャンプなどを通して社会教育をすると同時に、他市や他県の人たちも募集 して、基山町が登山・湧き水・草スキーなど自然を活かし人と自然が共存し ていることを知ってもらえたら、新たな観光スポットとして町も住民も活気 づく。 その他、基山町で生産している野菜など生鮮食品を他市で販売せず、基山 町で毎日買えるよう販売店を設けるかスーパーの一角に置き、地産地消を強 化し自給自足の町に。

※ 提案書に記載された事項のうち、提案者欄以外は公表されます。

60歳以上の人たちが集える場所は、基山町の各区17か所すべてに『サロン』というものが存在する他、町民会館や保健センターでのクラブ、社協など、基山町のあちこちに多く存在するが、それ以外の世代では、習い事の間を除いては子どもや親子が集える場所は少なすぎる。

日中子育て中の親子が集える場所を見ても、保健センター2F支援センターと社協のフリースペース、小学生の放課後に注目すると集える場所はさらに少ない。

基山小学校付近には、社協や図書館があるが、若基小学校付近には、居場所になるような施設はない。

これでは、習い事へ行かせるより他なくなる。

保育園が充実し、待機園児がないことが良いとされ、それを重視した政策が目立つ世の中ではあるが、みんながみんな出産し0歳児から保育園に入園させるわけではない。

しかし出産後、母親に迫ってくる責任感や不安感を取り除けるような施設や情報入手ができる場所は、充実していない。

そのため、日中子どもと一緒に過ごす保護者が育児に行き詰まると、『保育園へ、、、』『早く幼稚園へ、、、』と考えるきっかけになったり『子育てが楽しくない』と悩む原因になっているのではないだろうか。

しかし、育児や子育てに 喜びや楽しさを見つけられずに子どもと離れてしまうと、一緒にいる時間がどんなに短くなくてもそれを喜ぶことはできないのではないのか。

例えば鳥栖市では、昨年支援センターがまた1か所増え、児童館・園庭開放など含めると計12か所前後の場所で、ほぼ毎日、親子が集える施設がある。

基山町では、支援センター1か所・社協2Fフリースペース・月に2回園庭開放の保育園が1か所・その他月1～2回新図書館の読み聞かせ時間を合わせると4か所となる。『ほぼ毎日』に限定すると、親子が集える場所は2か所となる。

『集う』とは、『学ぶ』に繋がるのではないだろうか。

幼児や小中学生を持つ親が、地域の情報や子どもの取り巻く環境について知る場が一か所だと、情報は偏り、考えが固執する。

住めば都・・・ここに居れば『これで良し』『これで間違いない』『みんな同じ』と思えてしまうものであるが、これは、基山町ホームページにある『子ども・子育て支援新制度について』の具体的な取組要項3《保護者の質の向上》も図れない。

また『第5次基山町総合計画』では《8つの強み》として県外や都心へすぐに行けることや、広域ネットワークを挙げているが、言い換えれば、基山町で充実していないものは、他県や他市に頼ろうと、いうことではないか。

もし、他県や他市を意識するなら、近郊の子育て支援などを学び取り入れるべきではないか。

いままで基山町の中でも、それぞれ区ごとに活動し、またそれは各区の行事のようにされ、町全体へは、広報したり、募集することや活動を報告することもあまりなかったよう。区でする行事は同じ区に住む住民の参加のみという形が定着している。

しかし区によっては、年代別にみるととても差があったり、行事内容も全く違っていたりする。

世代別に見ても、『自分たちさえ、、、』ほかの人たちは何とかするだろう、というような無関心さを感じる。1万7千人ほどの人口の中で、区や世代でバラバラであって、いつまでたっても、町が掲げる『人口増加』『人づくり』『共働きのまちづくり』の構想は、このまま妄想で終わりがねない。

また、日本全体的にも同じことが言えるのかもしれないが、有り難いことに60歳代以上の人たちは、気力も体力も強く立派である。町民会館は毎日のように満室で、参加者の年齢は見る限りではあるが、子育て真っ只中といった世代ではない。ここに集まる人たちは学ぶことへの意欲と喜びを感じて日々を過ごしているように見える。

しかし、これから基山町の中心になって発展を考えていかなくてはいけない20代～40代の人たちの生涯学習環境はどこにあるのだろうか。

核家族・母子家庭・共働き・ご近所付き合いの希薄化…日々、自分の仕事に追われるように過ごし、町のことなどに気も付かないほど自分たちの生活が忙しい世の中だが、基山町のあちこちの地区の声やいろんな世代の声が聞こえる環境があれば、自然と自分たちの町が視野に入ってくる。

基山町には、児童館や生涯学習センターや公民館といった学習場所、生活に役立つ情報が入手できる場がないので、町民のニーズも見えてこない。

町の情報や各区の情報が一本化されれば、町がひとつになれる。世代関係なく利用できる場所が必要。

情報が混在するネット環境では、混乱するだけだが、この町の情報をこの町の人が情報収集し、伝えることは、住民の悩みや不安を解消するのに最も心強いものとなる。

一方からの情報を真に受けるのではなく、もう一方の情報を聞き入れる環境を整えることで、昔から住む人も移住者も住みよい場所になる。

基山町には、いろんな専門知識を持った人たちが在住していると聞く。

このような人たちを集めた人材バンクを作り、学びたいことや知りたい情報を住民が聞く場を、まずは行政が定期的に作ることで、『学習』という特別感や窮屈なイメージをなくし、月1回の息抜きと考えるような環境にすれば、住民は参加しやすく学ぶことが容易で楽しいものとなる。

そうして学んだ知識は、次の世代へと教えることができる。

例えば、就学児の保護者は、育児を始めたばかりの親の少し先輩として、育児の工夫や地域の情報を伝えることができたり、それが発展すれば子育て支援センターの管理スタッフとして携わることや、学習の場では、講師の話から学ぶ人と託児スタッフという立場から学ぶ人など、それぞれの立場からできることをしながら学ぶことができる。それぞれの立場や世代の人同士が繋がるきっかけをつくり、ネットワークの基盤ができれば、基山町の良さも広がると同時に、問題や課題に対する解決策も見えてくる。

小学生の放課後に関しては、共働きで大人のいない家に集まって遊ぶより、いろんな年齢の子ども達が集まれる施設があれば、自然と縦割りの関係の中で、学ぶ環境ができるし、中学生以上の子ども達も、気軽に試験勉強スペースやくつろげる場があれば、安心ではないか。今、基山町には24時間オープンファミレスやアミューズメント施設がないことが、非行やいろんな犯罪の防止に繋がっていると感じるので、このような場所ができて中高生の居場所にならないためにも、子どもたちの居場所に焦点をあて、考えるべきだ。

この環境づくりについては、いろんな工夫や大人の理解も必要になるため、近郊で実践しているところへ視察するなどして、情報と知識を収集する必要がある。